

文学の方法とリアリズムの問題

——ケラーのメールヒェン「仔猫シュピーゲル」をめぐって——

中 野 和 朗

批評が、小説や詩と同様に芸術の領域に属するものか、それとも科学の領域に属するものかを決定するためには勇氣ある決断が必要である。ルカーチはこの問題については、断乎たる口調でこう述べている。「わたしは、自分は芸術作品を創作しているのだという近代の批評家たちの僭越な主張を、便利な自己欺瞞とみなしている——中略——そうした自己欺瞞こそ、芸術理論のすべての本質的な問題において、表面的な、直接的なところに、いつまでもとどまっていることを、かれらにゆるすところの、あの、往々にして、尊大ぶった主観主義に追従するものです。——中略——批評は、芸術ではなくて、科学であり、ジャーナリズムである。——」¹⁾ この見解には誘惑的な説得力がある。実際のところ、時代を追って個々の作家、作品さらには文芸思潮などの批評を系統だてたものとして文学史は成立しているのであって、この文学史を、小説や詩と同様、芸術作品だとする主張は詭弁だと断じてよからう。文学史は、やはりれっきとした科学の分野に属しているものとすべきであろう。

批評が科学であるためには、そこにはおのずから客観的、科学的批評の基準が存在せねばならない。例えば、広大な文学の歴史を「リアリズム文学の起源とその発展」とか「リアリズム文学の系譜」といったことで個別のリアリズムの作家・作品の批評をまとめようとする場合、なによりも先ず「リアリズム」というものの明確な概念規定が必要である。つまりその規定がなければ、リアリズムの文学を他の有象無象の文学の大洋の中から取捨選別することは無論できないし、リアリズム文学としての優劣も判断できない。

リアリズムの規定に関しては、われわれは例のエンゲルスの“典型論”をほとんど公式化されたものとして持っている。つまり、エンゲルスによれば、リアリズムとは、「細目の真実のほか、典型的境遇のもとにおける典型的性格の忠実な再現を含んでいる」ということである。

ところで、いったいその典型の再現は、いかなる方法によって可能となるのだろうか。即ち、リアリズムの方法とはいかなるものなのか。

19世紀の「リアリズムの時代」に、ドイツにあってはその開花は必ずしも満足できるものではなかったが、チューリヒの作家、G. ケラーは、その中にあってもっともすぐれたリアリストのひとりとして評価は固まっている。たしかにかれの文学、とりわけ短篇集の傑作「ゼルトヴィラの人びと」は、それを裏づけるに十分である。かれはその各篇にリアリストの第一人者としての面目をいかに発揮して、「典型の忠実な再現」を見事に果している

ということができよう。

第1巻5篇、第2巻5篇、全10篇の「ゼルトヴィラの人びと」の中、第1巻の最後におかれた「仔猫シュビーゲル」は、リアリズムの方法を問題とする場合、たいへん興味深い材料をわれわれに提供している。というのは、この1篇は、ケラー自身によって「メールヒェン(童話)」とわざわざことわりが附されているからである。一般的に言えば、メールヒェンという方法は、「典型を忠実に再現」するに適した方法、つまり、リアリズムの方法とは考えにくい。そこで、本稿では、メールヒェンの方法を撰った「仔猫シュビーゲル」を中心的な対象として、「文学の方法とリアリズム」の問題について考察してみたい。

二

シュビーゲルとは、ずっと昔、この町(ゼルトヴィラ)に住んでいた^{ひつうもの}独身者の老婆の飼ひ猫の名前である。つまりこの短篇は、漱石の「わが輩は猫である」や、ティークの「長靴をはいた牡猫」と同類の、いわば「猫」ものということができ、主人公である牡猫にまつわる奇妙なお話である。

この作品は、1850年、ケラー(31才)が、48年革命挫折後の反動的空気が充満していたベルリンで孤独な生活を送っていた時構想され、他の4篇とともにまとめられて1856年「ゼルトヴィラの人々」第1巻として出版されたものである。ケラーの文学にもっとも大きな影響を与えたもののひとつにフォイエルバッハの哲学があるが、ケラーが、神聖な天上界を冒瀆し徹底した現世主義のこの危険な哲学者の洗礼を受けたのは、1848年、ハイデルベルクでのことであった。だから、その後執筆された「ゼルトヴィラの人びと」には当然のことながら、その影響がはっきりと現われている。それは、例えば次の様な点にである。

シュビーゲルは、女主人が生きていた時には彼女といっしょに何不自由なく、賢明に暮らしていた。彼は「けっして臆病でも不作法でもなく、誰にでもよくなつき、道理のわかった人たちからはけっして逃げかくれはしなかった。」(S. 247)そして「毎日を朗かに、上品に、また静かに暮らして、格別高ぶりもせず、裕福な礼節ある生活を送っていた。」(247)ところが、この平穩無事な生活が突然悲しい結末を告げることになった。

仔猫シュビーゲルがまさに青春の盛りを謳歌していた矢先に、「彼の女主人は老衰病でぼっくり亡くなり、美しい仔猫は主人もなく、親もなくあとへ残されたのである。」(248)そして彼の生活はたちまち貧窮してしまう。その結果彼は、「食物がだんだん手に入らなくなるにつれて、温厚な君子だったシュビーゲルもしだいに注意深くなり、そのためすべての徳性も消滅して、まもなく昔の彼とは似てもつかぬ風体になってしまった。」(249)そして「日一日とやせ細ってみすばらしくなり、おまけに食欲になり、卑屈になり、臆病になってむかしの勇氣も卑しからぬ人品ならぬ猫品も理性も哲学も、どこかへ行ってしまった。」(249)ということになってしまふ。

このような描写の中に、人間は環境によって、即ち物質的状况によって、外面の様子(姿形)は勿論のこと、心情、性格、物の考え方など精神的な事柄も変化してしまう、即ち「意識が存在を規定するのではなく、存在が意識を規定する」というあの唯物論の世界認識が、疑いようもなく現われている。

さて、このようにすっかり心身共に落ちぶれ果たシュビーゲルの前に立ち現われたのが、町の魔術師のピナイスである。

ピナイスについては次のように書かれている。「ピナイス氏は一種の何でも屋で、種々雑多な仕事をしていた。病氣も癒せば虱退治もする。歯も抜いてやれば金貸しもするというふうであった。孤児や寡婦は誰かれの区別なく面倒をみてやるし、暇なときには一ダース1銭で羽ペン削りもする、その他きれいな黒インキの製造もすれば、生がや胡椒、車に塗る油や蕎麥酒、止め金や靴鉋の商いもする、塔の時計の修繕もする、年ごとに気象や農業の年中行事や放血手法引図の入った暦もつくる」という具合で、また魔術の方は、「自分では学問的実験として、また自家用としてやっていた」「ゼルトヴィラの人々はいつもこういった大小さまざまの仕事を手を介してくれる男を町内に必要としたので、彼は町専属の魔術師に任命され、もう長年のあいだ明け暮れ倦むことを知らぬ熱心と熟練とをもってこの役を勤めていた。」(252)

この魔術師 der Hexer は、実に通俗的で、ゼルトヴィラの人々に重宝がられているお人善しである。魔術師らしい薄気味悪さとか怖しさが欠けているばかりではない、どこか問の抜けた愛嬌さえ備えている。こういう魔術師ピナイス氏は、本職の魔術を行うために何故か契約によって、自発的にゆずられた猫の脂が必要で、おちぶれ果たシュビーゲルと識るや否や、脂をゆずってくれと所望する。結局、何不自由のない生活の保障と、いちばん丸々と肥えた時に、生命をゆずる前に若干の猶予の了承を条件にシュビーゲルは、ピナイスと契約を結ぶ。この辺の筆の運びはまさしく「童話」にふさわしい。

契約といえば、かの「ファウスト」におけるメフィストヘレスとファウストが想われる。メフィストは、Teufel であり、ピナイスは、Hexer である。メフィストに較べるとピナイスは、魔力の点でははるかに小粒で、ピナイスの日常的な仕事は、まったく庶民生活の中になじみのものばかりである。メフィストがファウストからかたとしたのは、ファウストの「魂」であったが、ピナイスがシュビーゲルから、かたとしたのは「猫の脂」に過ぎない。ファウストは、いうなれば人生の深遠な哲学の大問題に悩み、迷える古典主義的な人間であるのに対して、シュビーゲルときたら！「どうだ、わしのところに奉公せんかね、どっさりえさはくれてやるし、腸詰や焼いた鶉で丸々肥らせてやるよ——」(250) などという、まったくくだらぬたあいのない誘惑のことばに、いとも簡単に、脂を売る契約に手を打つのである。ファウストの場合は魂が問題であり、シュビーゲルの場合は、胃ぶくろが問題なのだ。魂と胃ぶくろ、どちらが高尚か？ といえば、それは魂の方に決まっている、ということにしてもよい。しかしわれわれの人生にとってどちらがより基本的で切実な問題か？ ということとなれば、なんのちゅうちょがいろいろ、胃ぶくろの方に決まっている。早い話しが、胃ぶくろあつての魂ではないか！

だから、ピナイスの許で暮らすようになったシュビーゲルの変りようはこうである。「さてしかしシュビーゲルはかような豪奢な生活をして、何でも好きなことを好きなときにやったり飲み食いたりできたので、彼の身体は言うまでもなく目に見えて肥っていった。毛皮はふたたび滑らかになりつやつやしてきて、目は生気を帯びてきたが、しかし同時に彼の精神力も同じ割合で回復していったので、前よりもいっそう礼節を守るようになった。野蛮な欲望はおさまり、今では悲痛な経験を経て来たので、以前にもまして怜利になった。彼は食欲を慎んで消化しきれただけしか食わず、またそれと同時にふたたび理性的な沈黙思想に耽

って事物の根底を透視する眼力を得た。」(253)、魂の問題は、胃の腑の問題が解決されてから現われて来る。

ひもじさに窮々としていた時には、分別が無くなり、ピナイスとの契約の意味も吟味するゆとりもなかったのだが、生存を直接的に脅かす“食”の問題が一応満足されると、たちまち「精神力も回復」してきて今度は「生の哲学」の問題が起きてくる。

「或る日のこと彼は一羽のきれいな鶉を枝からおろして仔細らしく解剖してみたとき、この小鳥の小さな胃袋がまだこなれない食物でふくれているのを見た。——シュピーゲルは小鳥を悠然と食べ終ってから、このように楽しげにみたされた胃袋を、爪の先に引っかけて、哲学的観察に耽っているうち、彼はこの小鳥の、平穩無事に仕事を果たしたあとで、詰め込んだものを消化する暇すらもなく、命を捨てねばならなかった運命にそぞろ憐れの念を禁じえなかった。——」(254) シュピーゲルは、生きるために一生懸命胃袋をいっぱいにした挙句があっけなく死んでしまった小鳥の運命のはかなさをわが身において考えこむのである。そして飢えを満たすことの代償に命を捧げねばならない契約を結んだわが身がみじめで卑屈に思えるのであった。

このようなシュピーゲルの目まぐるしい境遇の変化とそれともなうシュピーゲル自身の変化についての描写は、前述したとうりフォイエルバッハの哲学に負っているのであるが、この唯物論的世界認識こそ、ケラーをすぐれたリアリストたらしめている第一条件といわねばならない。なぜなら、典型的境遇や、そのもとにおける典型的人間像は、正しい世界認識によってはじめて個別的にもまた総体的にも把握されることになるからである。

さて、物語りにもどろう。哲学を回復したシュピーゲルは、「ああ、なんとかしてこの係蹄からぬけ出たいものだ！」(254) と思う。彼にはこれという妙案も浮ばなかったが、利口な彼は、よく肥えるようにとピナイスが与えてくれる快適な生活条件や食物を敬遠して節制につとめたのである。だから「シュピーゲルは健康そうに色艶もよくなったけれども、一定の肥満度に停頓していて、魔術師が懇切な肥育法によってもくろんでいた理想には容易に達しないのにピナイス氏はひどく驚いた」(255) のであった。そこでピナイスは仔猫を訊問し、「うんと飲み食いし、養生をしてよく肥り、脂をつけるようにするのがおまえの義務だ。だからこの場で陰險な契約違反の節制はやめろ、さもないとただではおかぬぞ」(256) と契約違反の行為を非難する。それに対してシュピーゲルは「わたしは契約書の中にただの一言も、わたしが節制や健康上有益な行状を止めるなどと書いてあるのを知りませんね」(256) と契約書の文章づらを楯にとって理屈をこねる。それをきいてピナイスは腹をたて、「よし、しからばわが輩は契約によって汝をすでに十分肥満したものと宣言する。——5日たつと満月になる。それまでは書面どおりに生かしておいてやろう。だがそれ以上は1分たりとも許さんぞ」(257) とシュピーゲルに厳しく申し渡すのである。

童話の方法を駆使してここに描写されている内容は、実は単なる創り話して片づくようなものではなく実に生々しい現実的問題だといえる。契約によって、飢えたるものが、持てるものから餌を与えられる代償に、持てるものの意のままに操作され、果ては、己れの全てをとことんまで搾りとられるということ、この構図は、現代の資本主義的生産関係の基本をなんとするどく図式化して示めしていることだろう。もっとはっきりいえば、雇用者が被雇用者を一見大事に扱い、健康管理労働条件などで行うヒューマニスティックに見えるあれ

これの措置も、実は全てよりよく搾りとるため、生産性を高めるためにのみ講じられる措置に過ぎないという事実の暴露にも通ずるのではなかろうか。

さて、いよいよ二進も三進もいかなくなる破目に陥ったシュビーゲルは、窮地を脱する方策を考えめぐねるが、折しも美しい月の照らす秋のロマンティックな夜、1匹の真白な牝猫の愛らしい歌がきこえてくる。「たちまちシュビーゲルは前途に死が待ち受けていたことも忘れて、それに答えていちばん美しい牡猫の唄で、うるわしの牝猫の讃歌をうたった」(257)そして奔放な情熱に身をゆだね、「いよいよ月がまんまるになったとき、彼はこれら多くの昂奮や熱情のためすっかり憔悴して、以前にもましてみすぼらしくやせこけ、ぼろぼろになっていた」(257) これを知ったピナイスは怒り狂ってシュビーゲルを鴛島小屋に閉じこめて、今度は抜かりなく肥育に努める。この入念な管理下でシュビーゲルは肥らされ遂に脂をしぼり出される時がやってくる。しかしシュビーゲルは、この管理飼育の間にどうやら一計を考案したようであった。彼はいよいよ首が切り落されるという時、ぶつぶつとつぶやくのである。

「——あんな重大なことを軽々しくうっちゃってしまわなかったなら、もっと思い残すところなく死ぬるでしょうがねえ、だって死ぬのは別段いやじゃありませんからね。だが一つ善からぬことをしたということがありがたかるべき死をも苦しいものにさせてしまうのです。——」(260) シュビーゲルの計算通りピナイスはまんまとこのつぶやきにつまり策略にのってくる。ピナイスというこの Hexer は、いたるところでお人善しぶりを現わし、どじをふまされているがこれは、なんでもやってのけることができる、場合によれば魔法さえ使うことができるのに、どこか一つ知性が欠如していて、欲だけは、すこぶる強いところから来ているのである。われらが英雄シュビーゲルは、巧みにこの弱点を見抜きそれを利用し、全智全能をふりしぼって生命の危機から脱しようとする。ピナイスは、シュビーゲルがもらったつぶやきに好奇心をかきたてられしきりにそれはどういうことかききだそうするのである。そしてシュビーゲルは聞き手をじらしながら今は亡き女主人の1万グルデンにかかわる物語り——無論シュビーゲルの作り話なのであるが——を始める。この話しはかなり長いもので、いうなれば「劇中劇」的なものである。この「劇中劇」は、実に見事に精密に仕組まれており、ピナイスの好奇心を刺戟し、気を惹きつけ、夢中にさせ、作り話しに没入させ、ついには脂を搾ることも忘れさせてしまふ、その導入部は、けだし傑作というべきである。

シュビーゲルが死を前にしてやり残した心残りな仕事というのは、「女主人の残した1万グルデンの金」と、「色白で美しくて気立てのいいおかみさん」と、それに「聡明で律義な男」この3つをひとつに結び合わせるといふゼルトヴィラでは至難の事業だというのである。シュビーゲルは、いまや彼の術中にはまったピナイスの、前後を忘れた熱烈な求めに応じて、まずその1万グルデンの因縁から話し始める。「劇中劇」はこうして始まるのである。

シュビーゲルの女主人というのは、立派な婦人で「誰とも仲違いしたこともなく、一生嫁がずオールドミスで他界」(262)した。彼女は若いころは近在に並ぶものがない美人で、結婚を申し込む男がひきもきらず次から次と現われた。実にさまざま、数知れぬ求婚者の中から彼女は、これ以上望みうべくもない花婿選びの幸運にめぐまれたのである。「ところが、この女にはその美貌のほか、数千グルデンの莫大な財産があったのですが、これが女に心

を決めて一人の男を選びとる気にならなかつた原因」(263)となった。つまりその都度求婚者達の動機や意図に疑いをいだいたのである。「一人の尊敬に価する求婚者が接近して来て、多少でも気に入りはじめると、すぐさまこの男は持参金ほしさに自分を望むのではないかと考えるようになりました。もし金持の男ですと、女は、自分がもし同じように金持でなかつたなら、けっして自分を望みはしないだろうと考えるし、また貧しい男たちだと、結局彼らはただ財産だけに目がくらんでいて、うまい汁を吸ってやろうというのが目的なのだと思ひこむのです。そうしてこのかわいそうな女は自分自身でも物質的な財産を重んじていたのですが、求婚者たちの金銭や財宝に対する欲と、自分自身に対する愛とを見分けることができなかつた」(263) こうしてついに婚運びは全く難関に逢着し、彼女の生活自身が憂うつなものになってしまう。こういう状態を打解しようと彼女は、家をしめて、従姉妹のいるミラノへ旅をする。途中ザンクト・ゴットハルトの峠を越えた時には、ロイス河の奔流に身を投げて自殺をはかろうとさえする。しかし彼女は従姉妹のもとで一人の若い同郷の青年を識ることになる。そして「ひと目見た時から女はこの青年が好きになってしまつて、はじめて今度は自分のほうから恋に落ちたと云つていいほどでした。その男は美しい青年で、立派な教育を受け、態度にも気品があつて、その当時は裕福でもなかつたがまた貧しくもありませんでした。——学識こそ豊かでしたが、まるで小児のように罪のない無邪気な男でした。そうして彼は商人であつたにもかかわらずすぶる天真爛漫な心を持っており、——そのうえ態度もしっかりして紳士的で——こういった数々の美点に加えてみずみずしい美しさと若さが女の心を魅了し去つた」(265)のである。こうして女と男は恋し合うようになる。さて、事態は今度こそ順調に進行し、結婚式の鐘がなり渡るかと思われた。

彼は「青春の熱情を傾けて本気に愛しはじめたので、彼にとっては令嬢が世界中で最高至上のものとなり、この婦人に彼自身の生活のすべての幸福、すべての価値をかけるようになる」(266)女は「それに力を得、深く心を動かされたので、自分も同じく熱烈な恋に陥つて、もはや誰彼と選ぶなどということは問題でなくなつて」(266)しまつた。かくしてある朝のこと、彼は短い言葉で愛の告白をする。ところが、ところがである。女は「待ち焦がれていた男の告白を聞いた瞬間に、またもやいつもの疑惑が頭をもたげてきて、おりもあろうに彼女は、自分の愛人が商人であり、結局は事業の手をひろげるために彼女の財産を狙つてゐるのだということに思いついた」(267)そこで「自分のほうからも愛情を打ち明け、喜んで迎え入れてやりたくてたまらぬ心を抑えて、即座に男の熱意のほどを試すための新しい計略を思いつく」(268)その思いついた計略というのは、彼女には実は故郷に許婚がいて、彼女の夫となるべきその人は商人で、商売に破綻をきたしその金策のためにミラノにやつて来ているという浅薄なつくり話である。そして彼女は、彼を心より愛して、なんとかしてこの窮地から彼を救ひだし、彼を大商人にさせてやりたいのです。などとまことしやかに話したのである。これを、顔を蒼白にして黙つて聞いていた純心な恋する青年は、ぐちゃ不平めいたことは何もいわず、彼女の許婚の負債の額をたずね、1万グルデンということを知ると、きつと何とかなるから元気を出すようにと逆に勵ましてその場から立ち去るのであつた。この生真面目な、失恋した男は「このように真心から熱烈に他の男を愛していた婦人に目をくれたことにたいへん驚きかつ恥じていた。——それから彼はすぐさま商売仲間のところへ行き、嘆願したり、いくらかの損失をおかした末、彼が自分の全生涯を託するつもりで、近日中に彼自身がちょうど自分の全財産の1万グルデンで支払うはずになつてゐた注文や仕入

れを取消しにしてもらって、6時間とたたないうちに再び自分の全財産を携えて令嬢の家にあらわれ、どうかこの金を当座の間に合せて受け取っていただきたいと願(269)ったのであった。彼女は、今やその1万グルデンの素姓も察知し、この青年のこの行為から彼女への愛がまことの愛であることもようやく確信できるようになる。そこで彼女は、そのつくり話のつじつまを合せ大団円へと導くために、その1万グルデンを受け取るための条件を出す。その条件というのは、「定められた日に訪ねてきてくれて結婚式に列席するように、そして未来の夫の良き友となり庇護者^{パトロン}となって、また同時に彼女自身のもっとも誠実な友とも保護者とも相談相手ともなってくれることを神かけて約束すること」(270)である。彼はこれを断るが、強引で執拗な頼みに、結局、これらすべてを信仰と死後の冥福とにかけて誓約せねばならなかった。

彼女は、このような成行きで待望の結婚相手を見つけることができず心も晴れやかに、身投げをしようとしたロイスをこえてゼルトヴィラへと戻ったのである。

「家へ帰り着くと上から下まで開け放って風を入れ、まるで皇子様でもお迎えするように家中飾り立てました。しかし寝台の枕もとには1万グルデンの金貨の袋を置いて、夜になるとさも幸福そうに頭を硬い塊の上のせて、まるで柔らかな羽根枕に寝ているようにぐっすり眠りました。彼女は約束の日の来るのを今か、今かと待ちわびていましたが、彼が来ることは少しも疑っていませんでした。——しかしその日は明けましたが恋人は姿を現わしませんでした。——」(271)

相手の言うことをまっとうに、何のかけ値もなしに聞くことしかできない、傷つきやすい心を持った、無邪気であると同時に誇り高かった恋人の方は、こんなこととは夢にも思わず、スイスの軍隊に身を投じ、バヴィヤの戦闘であえない戦死をとげていたのである。「フランス王のいわゆる『名誉以外のすべてを失った』この戦闘でこの不幸な恋人は希望も名誉も生命も永久の浄福も、すべてを失いましたが、ただ一つ彼の身を焼きつくした恋だけは失いませんでした」(272) 戦死の報に接するや、ふとした遊びどころからかけがえのない幸福を失うことになってしまった令嬢は、「髪をかきむしり、着物を引きちぎって大声に泣きわめ」(272) いた。そして「彼女は錯乱したように1万グルデンの金貨を引きずって来て床の上に撒き散らし、その上にべったり身を臥せて、きらきら光る金貨に接吻しました。すっかり狂気になってあちらこちらへ転がってゆく金貨を掻き集め、まるでそこに失った恋人の活姿^{いきざし}が現われているかのように抱きしめようとしてました。昼も夜も彼女は金貨の上に身を横たえて、なにか一つ食べものも飲みものも口にせず、絶えず冷たい金属を愛撫したり接吻したりしていましたが、とうとうある真夜中突然立ち上がりて金貨をせせせと幾度も往復して庭に運び、悲嘆の涙にかきくれないながらそれを深い井戸に投げこんで、二度とふたたび人手にはいらぬように呪いをかけたのでした」(273)

以上が、シュピーゲルの語る「劇中劇」的ないまは亡き女主人の身の上話と1万グルデンの因縁話の全てである。

この挿話は、これ独自でも一つのりっぱな短篇ともなりうるほどの内容をもっている。悲劇的な恋の結末、生一本でいじらしい失意の青年、美しく魅力的でありながらどこか屈折した心の持ち主である女性像など、いずれもすでにケラーの小説に幾度も登場する形象である。

よく知られているように、ケラー自身幾度も恋をしながらいずれもそれが実らず、その都度失恋の悲哀を味わい、結局一生独身で終った。この作品が構想された1850年（31才）の時点でもケラーは、例えば、ルイーゼ・リーター（1847）や、ヨハンナ（1849）などとの恋にやぶれていた。あまりにも純情無垢のため恋にやぶれ失意の内に戦死してしまう青年の心情や、愛の破局への状況設定などにケラー自身のこういった体験が大きく重ねられていることは間違いない。しかしシュピーゲルの中間に挿入されているこのエピソードの中で、決して見落してはならない重大事は、最後には狂気に終る女主人公の形象にある。つまりこの人物像は、ケラーが他の諸短篇において創り出している、いくつものすぐれた典型的人間像のひとつに数えることができる。このエピソードの悲劇は、もとはといえば、拝金主義によって蝕まれた女主人公の心から生まれている。つまり、資本主義社会の中で現われる近代人の典型的疎外態に外ならない。

ところで、再びシュピーゲルの運命に戻ろう。

シュピーゲルの己が命を救わんがための術策にまふまはまったピナイスは、長い長い1万グルデンにまつわる話しをきき終るや、直ちにそれに反応する。この場合も魔法を用いるピナイスですら、所期の目的であった魔法の素になる猫の脂はすでにそっちのけになり、関心はひたすら1万グルデンに向けられる。ピナイスはすぐにもその1万グルデンをとりに行こうとする気配さえ見せる。こうなってしまうもはや事態の成りゆきはシュピーゲル次第になり、このあたりから主客が転倒し、とらわれの身は牡猫か魔術師か判然としなくなってくる。シュピーゲルは、はやりたつピナイスを制して、亡き女主人の1万グルデンに関する遺言をここで明すのである。それについては次の様に書かれている。

「おまえにわたしの言いつけを実行する全権を譲ることにしますよ。八方に気を配って絵に描いたような美人、それでいてちっとも財産のない、そして貧しいために結婚の申込み手もないといった女を探し出しておくれ。もし分別のある、心の正しい、美しい男で自分は裕福な暮しをしているながら、その乙女を貧しいのもかまわず、ただ美しさに心をひかれて妻にしたいと望んでいるような男が見つかったら、ちょうどわたしの不幸な恋人のように、女に誠実で、献身的で、心変わりせず一生涯その女の言うことには何でも従うことを、その男に堅く誓わせねばなりません。そうしたなら井戸の中の1万グルデンを花嫁に持参金として与えて、結婚式の朝お婿さんを驚かすようにしておくれ」(274)

シュピーゲルが言うのには、この委託を果さずに死ねば、故人の霊も成仏できないだろうからそれがなんとも心残りなのだという。ピナイスは矢も楯もたまらずシュピーゲルを案内させて古井戸に来る。そしてたしかにその底にきらめく黄金を認める。そしてこうひとりごちるのである。「あそこに金はあると……そして男もここにいるとして、ただ一つ絵に描いたような美人がないな」(275)と。ピナイスは、はやくも「1万グルデンと男と女」の三位一体の中に、みずから立候補してこの願ってもない果報をわがものにしようとする意欲を燃やす。この様子を眺めながらシュピーゲルは美人の方もちゃんと見当がつけてあるのだが、と言う。ピナイスは、早速その女のところへ行行って自分で結婚を申し込むため、その女の居場所をききたがる。ところがシュピーゲルはいたって冷やかに、それをするためにはシュピーゲルの手を経ねば不可能だと言い、そのためには自由をとりもどし、命が保証される必要がある、とたたみかける。先程から限を貪婪に光らせ、ひからびた唇を涎で濡らしていたピナ

イスは、ここに至ってようやくシュビーゲルの真意に気付く。そして『おれを苦しめてくれるなよ、シュビーゲルや』とピナイスはほとんど泣き声になって言った(277) それにたいしてシュビーゲルは、「あなたはわたしの頭の上に命取りの剣をぶらぶらさせていながら、おれを苦しめてくれるな、とはおかしいこと」などとゆとりのあるところを見せながら、わたしの首をはねるか、自由にするか2つに1つだとピナイスにせまる。ピナイスは溜息をしながら契約書をシュビーゲルの前においた。「おかれるとみるやたちまちシュビーゲルは、ばかりとくわえてそれを飲みこんでしまった。そのためひどく喉がつまるようだったが、彼にはそれが今まで食べた中でいちばん上等な滋養豊富な料理のような気がした。——」(278) かくしてシュビーゲルはみずからの才覚によって魔術師の手から生命を解放することができたのである。

物語はここで終ってはいない。このあと、シュビーゲルは「望みの花嫁を欲得からでなく、もっぱら女の美しさへの愛情から結婚しようというのではなくて、あらかじめ1万グルデンの経緯を承知でいながら、自分をごまかし世間をだますことができると思った魔術師の阿呆さかげんを面白がった」(278) そして、焼いた鴨や風や腸詰のお礼に愚かな魔術師にかれの家の向かい合いに住む純白の頭巾と服をつけている、とがった鼻やあごをもち、意地悪そうな目つきをした年とった半俗尼、実は夜になると、神様がお創りになったときのままの、悪魔が好んで見たがる素裸で箒にまたがり煙突から飛びだしてゆく魔女を、かみさんとして背負いこませてしまう終局までのくだりがつづいている。ピナイスと魔女の婚礼の場面は、まことに痛快に描かれている。

婚礼が終わってしまうと、それまで美しく魅惑的であった妻がいつのまにか向いに住んでいる老いぼれ婆の純白の尼さんになってしまう。ピナイスはびっくり仰天するが「尼さんは立ち上って彼のほうへ近づき彼を自分の前に立てて婚礼の部屋へ押してゆき、そこで悪鬼のような魔術を用いてこの世で誰も経験したことのないような拷問にかけた。そこで今では彼はこの老婆と二度と離れられぬ夫婦になった。——ピナイス氏はしかし、この時以来まことに惘然たる生活を送った。彼の妻はたちまちのうちに彼の秘密を手に入れて全く亭主を尻にしていた。彼は少しの自由も気晴しも許されず、朝から晩まで根の続くかぎり魔法の使い通しであった」(286) という。「それからというもの特に性悪の嫌うべき妻を娶ったようなとき、ゼルトヴィラでは、『彼は猫から脂を買いとった』と言われるようになった」(286) とさ、というところでこの猫の童話は終っている。

三

この作品はメールヒェンとことわり書きが附されているが、以上みてきたとおり、主人公の猫をはじめとして、ふくろうや魔術師や魔女などが登場し、幻想的な世界のいりどりもかなりもりこまれ、たしかにメールヒェン仕立てになっている。全体の構成もハシにも棒にもかからぬようなかみさんをめとった時などに用いられる「猫から脂を買いとった」という、ゼルトヴィラに古くからある得体の知れない奇妙な諺のルーツを解明するという体裁をとっている。とくに題名ともなっているこの物語りの主人公であるシュビーゲルが、なんといいても——いかに巧みに擬人化されていても——仔猫であり、しかもどうやら本当の主人公は

ピナイスであって、シュピーゲルは実はこの物語を進めていくための狂言まわしとしての役どころ、というのが実態なのではなからうか。だから、擬人化された猫の個々の部分描写の中には、リアリティがあるにもかかわらず全体としてはまことにリアリティに乏しい存在となっている。となると主人公は誰かということになるが、これは明かにピナイスであろう。ピナイスは Hexer とされている。しかしこれは、シュピーゲルが童話的実体が擬人化されているとすれば、現実的存在が童話化されているのである。したがって、シュピーゲルとは逆に、個別部分的にはメールヒェンののであるにもかかわらず全体としてはまことにリアルな存在となっている。ピナイスについては何をしている人間か？ 何で食っているのか？ がはっきり書かれている。「ピナイス氏は、一種の何でも屋で種々雑多な仕事をしていた」とある。今日でいえばさしずめ百貨店であろうか。「病気も癒せば虱退治もする、歯も抜いてやれば金貸しもするというふうであった」。つまりこれは医院、保健所、歯科医院、銀行経営ということになる。さらに「孤児や寡婦は誰かれの区別なく面倒をみてやるし暇なときには1ダース1銭で羽ペンを削りもする、その他きれいな黒インキの製造もすれば、生がや胡椒、車に塗る油や薔薇酒、止め金や靴紙の商いもする、塔の時計の修繕もする、厝もつくるという具合」であるが、これらはいずれも孤児院や養老院など社会福祉施設経営、文房具製造販売、食料品製造販売、靴屋、時計屋、ということになるろうか。さらには法律事務所や、化学研究所もいわば、趣味として開いているらしいことも察せられる。要するに今日でいえば一大コンツェルンの経営者に相当する。これらの経営を支えていくために魔法の素である猫の脂が必要であり、契約によって合法的に脂を搾りとらなければならない。このことは近代的資本主義的生産様式の実態を象徴的に描いているようにも思える。ピナイスは、うさんくさい1万グルデンに目がくらんで、とどのつまりはとんでもない女をかみさんにすることになり、奴隷のような結婚生活を送る破目にあうのであるが、この物語りは、シュピーゲルの語る女主人の悲しい愛のエピソードとともに、拜金主義に毒された破局的な愛の実相をあますところなく暴露して描いている。

そのほかシュピーゲルの女主人の軽薄な行為の犠牲となるあの「学識はあるが天真爛漫な邪心のない生一本」な若い商人は、ほかでもなくまさに人間として大切なこのような美点の故に破滅させられている。

ピナイスと結婚することとなった、ピナイスの向いに住んでいる年とった半俗尼についての描写も、メールヒェンの形式を存分に活用し、一面では、（つまり外面は）清楚で信仰心あつい世間ばなれした女として、また他面では（つまり内面は）実はほかならぬ夜な夜な素っ裸で箆にまたがって煙突から飛び出してゆく魔女として描かれており、女性のひとつのタイプを、あるいは女の本性の表と裏を、これまた冷徹にかつ諧謔的に示めしているといえよう。

「ケラーの作品は、民主主義を強化し民衆を民主主義へ教育しようとする努力から生まれたが、そのさいケラーは、利潤の追求と『企業家根性』を、すなわち強まる資本主義化から生ずるかざかざの危険を見のがさず、しかもそれらの危険を、克服可能であるとの確信をもって批判的・写實的に描写した。かれの作品にユートピア的性格のものがあるのはそのためであり、かれのユーモアもそうした楽天観から発している。それは諦念でも、美化でもなく、むしろ人間と状況の弱点を暴露し嘲笑することによって、それを改善しようとするものであった。」²⁾とゲールツも述べているが、「仔猫シュピーゲル」の場合にもこのことは全てあて

はまっている。

以上みてきたとおり、童話として書かれている「シュピーゲル」においてもケラーは、ピナイス、シュピーゲルの女主人、その恋人の若い商人、ピナイスと結婚する女等々、いずれも「典型的性格」として忠実に再現しているのである。

さて、この作品の分析を通して「リアリズムと文学の方法」に関して、果してどのような結論が導き出せるだろう？

疑うべくもなくケラーは、この作品ではメールヒュンの手法を巧みに駆使している。にもかかわらず、この作品は「ゼルトヴィラ」の他の諸篇、たとえば「三人の律義な櫛職人」「幸運の鍛冶屋」「失われた笑い」等々と同様、すぐれたリアリズムの傑作となっている。だとすれば「リアリズムの方法」とはいったい何かということになる。

このことから、リアリズムの方法（もっと厳密に、リアリズムの創作の仕方、手法といった方が適切かもしれないが）は、リアリズム（文学）の本質的問題ではないということがはっきり指摘できる。従って、リアリズムをリアリズムたらしめる最も基本的で本質的な問題は何かといえば、それは複雑多様な現実の中から、正しい世界認識によって、諸現象、諸形象、諸関連の真実を見抜くこと、つまり典型的状況における典型的性格を正しく明確に把握すること、これであるとしか考えられない。「くそリアリズム」がリアリズムと言えないというのも、そこには「典型」の認識が欠乏内至は歪んでいるからである。

リアリズム文学の創造は、まず、現実を見据えてそこから個及び全体の関連の真実を把握するということと、ついでそれを適切な方法によって芸術的に再現するという、2つの過程の統一的な総合として達成される。

メールヒュンの方法とリアリズムの見事な統一、それが「仔猫シュピーゲル」¹であるといつてよからう。

註

テキストとして用いたのは Gottfried Keller *Sämtliche Werke in 8 Bänden* VI. Aufbau-Verlag Berlin 1958 である。本文からの引用のあとの数字はこのテキストのページ数である。なお、訳文については、世界文学大系、79巻「メーリケ・ケラー」所収の堀内明訳をほぼ利用させていただいた。

- 1) G・ルカーチ、伊東勉訳「リアリズム論」、理論社 1969. 82ページ
- 2) ゲールツ「ドイツ文学の歴史」朝日出版 1978. 475ページ